

動詞・述部の日英比較

丹 羽 都 美

Verb Phrases in Japanese and English

Satomi NIWA

Abstract

Various grammatical differences in structures and behaviors have been observed between Japanese and English. This short paper first looks into the differences seen in the formal representation of Aspect and that of tense in embedded sentences in both languages, especially focusing on the items appear as aspect, and then argues that the apparent differences in Japanese and English on the sentence structures for Aspect and tense in embedded sentences can be explained with the existent structures and different parameter application.

Key words

finite clauses, infinite clauses, Aspect, Infl

1. はじめに

本論文では、英語と日本語の動詞の上に具現される時制について、特に相表現に関して比較検討する。

日本語には、英語の進行相・完了相にあたる感覚や語彙形式は存在しても、一見したところ相表現そのものだけの形式というものは存在しない。また、日本語の埋め込み文は、時制の一致が存在しないことについても英語と大きく異なるように考えられる。

しかしながら、独自の形式がないことが、必ずしも相表現に該当する投射が存在しないということにはならない。また、日本語の埋め込み節の時制に関する振る舞いは、英語の非定形節と似ている。ここでは、その二つの現象を取り上げ、英語と日本語の相表現の投射について考察する。

本論の序章に当たる第1章に続き、第2章では、日本語と英語の相表現を詳しく考察する。第3章では、日本語と英語の伝聞を表す埋め込み節の時制について改めて分析する。第4章は本論文の結論となる。

2. 日本語と英語の相表現

動詞の完了相・進行相について、日本語にはそれぞれ「～てしまった」「～ている」という表現があるため、一見したところ、日本語にも完了相・進行相があるように思われる。しかしながら、日本語の「～てしまった」「～ている」は必ずしも完了相・進行相を表すものとは限らない。

- (1) a. 今日の宿題は (を) すませてしまった。

- b. 彼を怒らせてしまった。
 (2) a. 彼は本を読んでいる。
 b. 空は青く澄み渡っている。

(1a)(2a)は日本語でも何かの動作が完了したり進行したりといった表現である。一方、(1b)は「過去のある出来事」すなわち、「彼を怒らせたこと」が何か現在に関係があるという意味では完了形に当てはまる部分もあるが、純粋にそれだけでは終わらない。日本語の「～てしまった」は完了の意味でない場合、何かしら悪いことや好ましくないことなどを（誤って）してしまった罪悪感や反省といった意味合いが含まれている。英語の完了形にはこの、何かしら悪いことなどをしてしまった罪悪感や反省といった意味合いが含まれることはその場面に応じて、であって、日本語のように反省感や罪悪感は根本には全く存在しない。(2b)は、進行相ではなく、状態を表しているものである。この点を以下でもう少し詳しく見てみることにする。

2.1 完了相

英語の完了相と単純な過去形との違いは次のように説明される。

- (3) a. I lost my key.
 b. I have lost my key.

(3)が表している出来事は、「過去に鍵をなくした」ということであり、この点では(3a)(3b)とも全く同じことを述べている。しかしながら、(3a)は過去の出来事について述べたもので、単純な過去形だけを使用していることから、それが現在どうなっているのか、すなわちそのなくした鍵について現在どんな状況にあるのか、については全く言及していないということが、英語母語話者には理解される。一方、(3b)は過去に鍵をなくしたことが何らかの形で現在に影響がある¹ということを経験母語話者は理解する。現在に影響があるため、過去の出来事について述べているにもかかわらず have という現在形をもつ助動詞が文の中に出てくるのである。

日本語について考えてみると、(1)で示したように、日本語にはこのような形式的な使い分けは存在しない。また、完了形と思われる「～しちゃった」「～してしまった」は、確かに何かをし終えたという意味で使われるが、同時に場合によって「何か悪いこと／好ましくないことをしてしまった」というニュアンスを持つことから全く同一とは言えない²。

また、英語の完了相には、(1)で示した「完了」以外に次の(4)に挙げる「結果」「経験」「継続」という意味がある。

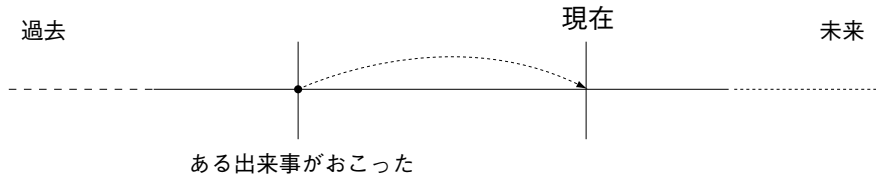
- (4) a. My sister has gone to Austria to study music. (結果)
 b. I have never been to the Rockies. (経験)
 c. We have lived here since 1975. (継続)

(4a)は「行ってしまった結果、今ここになくてオーストリアにいる」という意味になる。(4b)は「まだ一度も見た経験がない」という意味で、(4c)は「ここに1975年からずっと住んでいる」という意味になる。

一方で、日本語の「～てしまった」には「結果」のような意味には対応するかもしれないが、(4b)(4c)の解説からもわかるように「経験」「継続」には対応しない。

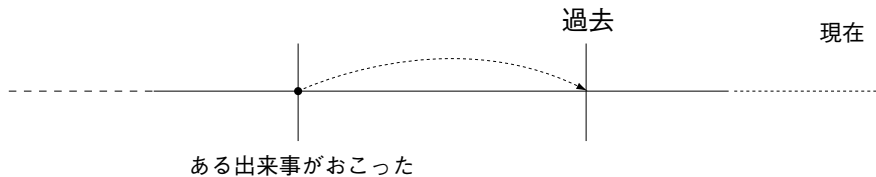
英語の完了相は、現在完了を例に用いて図示すると下記のような意識を持ってとらえられる。

(5) 現在完了

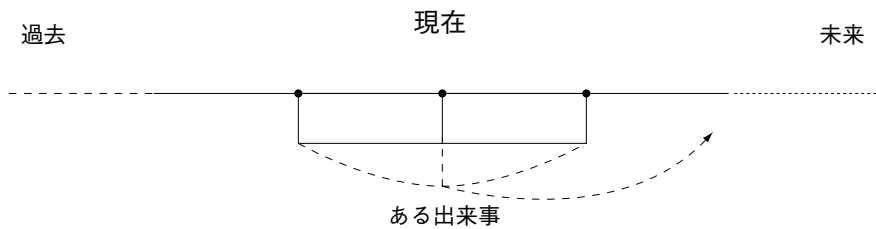


意味が「完了」「結果」「経験」「継続」のいずれであっても、出来事は過去に起きたことで、それが、現在とどのように関係があるのかということが暗示されているのである。未来完了相・過去完了相というのは、この「____とどのように関係があるのか」の軸が、それぞれ未来、過去にずれたものと考えればよい。

(6) 過去完了



(7) 未来完了



過去完了では、過去に起こった出来事とその出来事以降の過去のあるときまでとどのような関係を持っているのか、を述べるものであり、未来完了は過去に起こったり現在起きていたり未来に起こる出来事が、未来のある時点までとどのような関係を持つのかということ述べるものである。日本語には、これらそれぞれのためだけを目的とした形式は存在しない。

英語の進行相・完了相は、be + Ving, have/has/had + V-en という形式がそれぞれ進行相、完了相という相表現を担当する形式として存在するが、日本語には、進行相・完了相のためだけの独自の形式というものが存在しない。「～ている」は進行相も表せば、状態も表す。「～しまった」は完了相の中の完了・結果の意味は表すが、それ以外の意味、すなわち経験・継続・結果などを表すことはなく、完了・結果の意味としても罪悪感や反省の感情を含むことが可能である。

先に述べた状態動詞と動作動詞の相表現に関する振る舞いの違いについては、動詞本来の意味がその相形式と一緒にあって様々な意味を持つことになることから、動詞の表す事象の終結性 (Telicity) に負うところが大きいことがわかる。このことには動詞の持つ event 項というものの位置づけが関わっていると考えることもできる。Krazar (1995) や Diesing (1992) は event 項は stage-level predicates の項構造にのみ存在し、individual-level predicates の項構造には存在しないとしている³。このような event 項の存在・不在が動詞の表現する出来事の継続性や一時性に関わる。

- (12) a. John said that his wife is pregnant.
 b. ??John said that his wife is dancing.
- (13) a. John said that his wife was pregnant.
 b. John said that his wife was dancing.

時制の一致を受けていない(12 a)の発話は、ジョンの妻は話し手がジョンに話を聞いたときもそして今この発話をしているときも妊娠中である、ということ聞き手が理解する文である。一方時制の一致を受けた(13 a)は、ジョンから話を聞いたときはジョンの妻は妊娠中だったけれど、この発話を話し手がしている時点では、妊娠中であるかどうかには言及していない文である。(13 a)は、be pregnant という出来事が、一時的でなくある一定期間は継続する述部であることから可能なものである。一方、(12 b)は非常にジョンの報告と話し手の発話が非常に近接して行われた場合は(12 a)のような発話時点までの継続性も可能ではあるが、通常は(13 b)のような時制の一致を受けるものである。それは、be dancing という述部が一時的な動作を表すからである。そして(12 b)の継続性が派生する可能性は、dance という動詞は動作動詞であるため一時的なものであるが、ここに進行相という形式が付随することによって生じるのである。

このような event 項の有無が出来事の継続性や一時性を決めるとすれば、日本語、英語ともに動詞の意味解釈の上ではまずそれぞれの動詞の基本的な意味解釈の一部に規定値として継続性や一時性に関わる指定がされていると考えることができる。

英語は相投射を用いることで、(7)から(11)に図示したように、出来事の「線」状の意味を派生することを可能にしている。では、これらの形式が存在しない、又は存在するということが何を表しているのだろうか。この2言語がそれぞれ同じような解釈ができるのはどのような装置によるのであろうか。

実際、日本語には完了相や進行相というその表現のためだけの固有の形式はないが、次のように考えることで時制解釈に関して、英語の相形式が与える関数的な役割を語彙形式が十分に果たしていると考えられる。

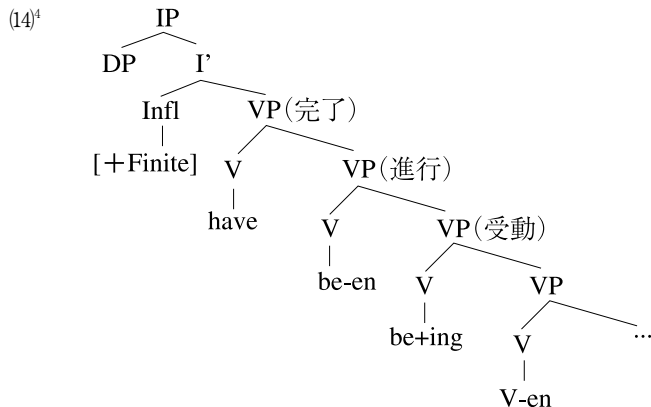
進行相に該当する日本語の語彙形式もしくは屈折は「～ている」である。これは、先述したように進行相のみでなく「状態」を表現する接辞でもある。英語は「状態」を表す接辞を持っているのではなく、「状態」は語彙の意味の中に埋め込まれて語彙自体に具現はされない。従って、「状

態」という意味を表すことにおいて、語彙の意味の中に最初から埋め込まれて具現はされないという方策を用いた言語が英語であり、日本語は語彙の中には埋め込まれず、語彙上に具現されなければならないという方策を用いていると考えてもよい。

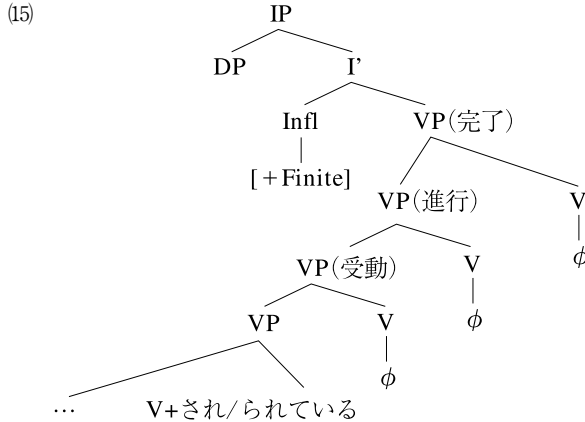
さらに、英語においては Ving という形式、すなわち、ing という屈折接辞に日本語の「～ている」が対応している。英語は be 動詞と Ving とが一对として用いられないと進行相ととならないが、日本語は動詞に「～ている」が付いているだけで進行相の表す意味を表現できる。「いる」が現在を指し示す屈折であり、「た」が過去を指し示す屈折であるため、「～ている + た = ていた」だけで過去の状態・進行相を持つ動詞とすることができる。

完了相については、英語が have と V-en が一对となった 1 種類の形式で、完了相の「完了」「結果」「経験」「継続」といった様々な意味を表すのに対して、日本語は 1 種類の固有の形式を持たず、「完了」「結果」の場合は、「～てしまった」、「経験」の場合は、「～たことがある」、「継続」の場合は、「ずっと～ている」というこの接辞もしくは副詞とで表現するという手法を用いている。

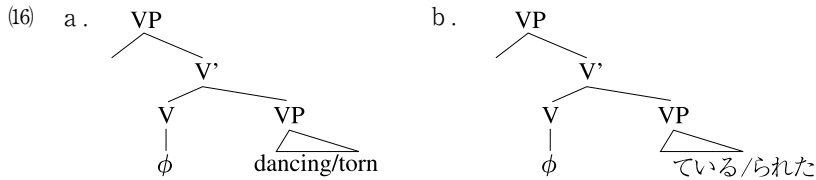
このことから、Ouhalla (1990) の考える相投射 AspP はそれぞれの言語ごとに任意の投射であるか、投射として考える必要がないものとして扱うことができると考えられる。そうであるとすれば、ここでは、原点に戻って Akmajian et al. (1979) の動詞句の多重構造にならない、相は独立した投射ではなく、動詞句の一部であると考えことにする。



この構造の中で、英語の場合は、進行相や完了相を表す VP が投射される場合、この派生の段階で、動詞の意味構造に対してそれぞれが関数として働き、意味を作り上げていく。日本語の場合も実際は同様に、必要に応じて VP が投射されているが(15)の完了・進行相の VP 投射の中の have や be に該当する動詞は出現しない。これらの「助動詞」に該当する要素が出現しないこと、すなわち、これらの VP 投射の主要部が空主要部であること、が日本語と英語との違いであると考えることができる。



このように重要な機能範疇の主要部が空主要部であると考えすることは、特別なことではなく、代表的なものが総称的な場合の DP 主要部や、主語以外を修飾する際の関係節の CP 主要部などが実際に存在する。それは、英語の分詞の形容詞用法が、a dancing girl 「踊っている女の子」 torn paper 「引きちぎられた紙」のように英語の完全な動詞句の場合には要求される主要部が欠けた状態で機能するのと平行していると考えてもよい。



そして、この考えをもとに、日本語の動詞表現に表れる時制を表すような接辞について(16)(17)を比較してみる。

- (17) a. 寝る子は育つ。
 b. 寝ている子は育つ。
 c. 寝た子は育つ。
- (18) a. 読書の好きな(好きである)子は漢字を早く覚える。
 b. *読書が好きでいる子は漢字を早く覚える。
 c. 読書が好きだった子は漢字を早く覚える。

(17)の「寝る」は動作動詞、(18)の「好きだ」は状態動詞である。この二つを比較すると、過去を表す屈折接辞の場合は、「完了」の意味を、「ている」は「進行相」に該当していることが見て取れる。また、(18b)は非文法的と判断できる。これは、英語の状態動詞が進行形にならないということと一致している。このことも日本語と英語の相に該当する投射の構造を支持するものだと考えられる。従って、日本語の「ている」「だった/した」は進行・完了相のみに使用される形式ではなく、状態や過去にも用いることのできる屈折として扱うのが妥当である。

では、空の主要部がどのようにして時制を決定に関わることができるのかという疑問が生じるかもしれない。空の主要部が時制の同定に関わっている中国語の仕組みと平行した仕組みを想定することが可能である。中国語の動詞には時制表現は具現されず、音声的にも時制表現や区別は存在しない。動詞は常に時制に対しては無標である⁵。従って、中国語の文がどの時制に当たるのかは、文中の時制に関わる副詞句が文脈で決定される。中国語においての時制の判断は、その文が話されている環境、即ち話し手・聞き手が立っている「現在」という軸に照らし合わせて、さらに、文中に現れる時制に関わる語句や命題の内容にしたがって解釈される。従って、不履行の場合、どの時制も話者・聴者の立つ軸「現在」に常に照合して決定・解釈されると考えられる。つまり、制約がなければ、従属節の時制は、直接上位にある主節の時制に照らし合わせるのではなく、さらに外部にある発話の基点に照らし合わせて考えられているとすることができる。すなわち、空の主要部は空であることによって、時制の決定を他の時制決定力のある要素に譲るといふことに過ぎない。

これは、Niwa (2003) (2007) で考察したメカニズムで簡略化して説明すると次のようになる。時制に関する意味解釈は、意味を構成する一種の合同体を、時制に関する素性が派生の諸段階を通してその内部を埋めていくことによって文の指し示す時制を決定づけると考えることが可能である。[±Past] (= [+Finite]) という素性が定形節の場合は動詞の上に具現されている時点で、その時制解釈の核となる部分を決める。そして、動詞・述語の意味素性は関数の役割を果たす。individual-level predicate であれば、継続的な意味として、stage-level predicate であれば、一時的な意味として、その動詞に具現された[±Past]という核となる素性を中心に、時間軸の上に出来事像を投射することになる。時制に関して、[±Past]が与えられていない中国語の定形節の場合は、意味上の指定が不履行の部分に対して、前述した動詞の元来持つ終結性に関わる意味素性が時制に関する解釈の方向性を与えた上で、時制について不履行の部分が文脈という意味の場の持つ値を継承することになると考える。日本語では、「る」「た」という屈折接辞があり、それが主節の IP の位置まで同様の屈折が影響を与える位置⁶に存在しない限り、本質的に持っているそれぞれ現在、過去という時制が照合されることになる。そして、日本語の場合も、時制に関する意味を構成する合成体を派生の段階で作り上げていく上で、同様に、主要部が空である相という関数を用い、時制に関する語形や副詞句と文脈が補って、時制に関する意味決定をすることになると考えることができる。日本語も、場合によって文中の副詞句によって動詞の相表現に該当する意味を派生することができる。

- (19) a. もう宿題は済ませた。
 b. I have already completed the task.
 c. He has just completed the task.

英語の完了相(19b)(19c)ではともに「すでに」完了したことであるが、現在との出来事との時間関係について顕在的な副詞が、相表現の解釈を補助して出来事の様相が異なっていることを示している。(19a)の日本語文も、動詞が「てしまった」という形になっていなくても、副詞の存在によって「完了」の意味を持つことになる。

このように、日本語も英語も同じような形で時制に関する意味解釈の合成を考えることができる。そして、相に関しては、日本語と英語と構造は同じ多重の動詞句構造を持っており、英語は

その主要部に要素が顕在化することが求められるが、日本語はその主要部が空の要素で、従って、いずれも、時制の意味解釈を派生する際に、合成体を作るための関数として働いている考えることができる。

3. 英語と日本語の埋め込み節

この節では、英語と日本語の伝聞を表す文の時制に関する振る舞いについての違いに焦点をあて、それが何に由来するものであるかを示す。

英語の伝聞を表す文では、埋め込み節と主節で時制の一致が生じる。

- (20) a. John says that he studies Linguistics.
b. John said that he studied Linguistics.

しかしながら、命題の内容と話し手の判断によっては、時制の一致の例外も許される。

- (21) a. John said that his wife was in hospital.
b. John said that his wife is in hospital.

(21)の場合、ジョンの妻がこの発話の時点でも入院していることを話し手が知っている場合もしくはそのように判断した場合には、(21 b)の発話を行うことが可能である。この場合、聞き手も「ジョンがこのことを話し手に伝えた時点からこの発話をする時点までジョンの妻は入院している」ということを理解する。一方で、(21 a)の文の場合は、聞き手にとっては、ジョンが話し手に伝えた時点ではジョンの妻が入院していたのだが、この発話の時点ではジョンの妻が入院しているかどうかはわからない。しかしながら、時制の一致はどのような命題の埋め込み節にも可能なわけではない。

- (22) *John said that his wife buys *Pride and Prejudice*.

(22)は命題の内容である「『高慢と偏見』という本を妻が買う」ことは、常識的には一回しか生起せず、繰り返し行われる行為ではない。従ってジョンの発話においてもこの発話の時点でもすでに終わってしまった出来事であって、現在もその行動をしているとは考えられない。これは「ある特定の作品を買う」という述部が *stage-level predicate* であり、一時的なものだからである⁷。このように英語は通常時制の一致を要求する言語である。

では、日本語では(20)のような文を作る場合、どのような振る舞いをするであろうか。

- (23) a. ジョンは言語学を勉強していると言っている。
b. ジョンは言語学を勉強していると言っていた。

(23 a)は(20 a)に対応し、(23 b)は(20 b)に対応する。注目するところは、日本語の(23 b)では埋め込み節の動詞が「勉強している」であるのに対して、英語の(20 b)は *studied* と過去形であると

ころである。では、文中の動詞を日本語でも過去形にするとどうなるであろうか。

- (24) a. ジョンは言語学を勉強していたと言っている。
 b. ジョンは言語学を勉強していたと言っていた。
- (25) a. John says that John studied Linguistics.
 b. John said that John had studied Linguistics.

(24 a)では、ジョンが言語学を勉強したのはこの発話をしている現在より以前のことでありと解釈される。これは、英語の(25 a)に対応するものとなる。(24 b)はジョンが言語学を勉強したのは、ジョンの発話より以前のことでありと解釈される。これは、英語の(25 b)に対応するものである。

このように、日本語で埋め込み節の動詞に「過去形」が具現されると、埋め込み節の出来事は主節の動詞の時制よりも一つ古い(昔の)時制に起こったことであると解釈される。英語では、埋め込み節の時制はその出来事が生じた時をその動詞に具現することが要求される。

しかしながら、英語には日本語の埋め込み節に似た構造も存在する。

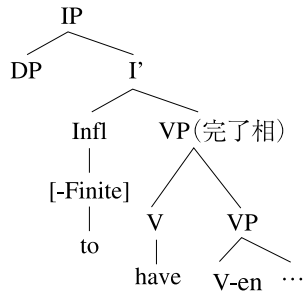
- (26) a. John is said to be rich.
 b. John is said to have been rich.
 c. John was said to be rich.
 d. John was said to have been rich.
- (27) a. It is said that John is rich.
 b. It is said that John was rich.
 c. It was said that John was rich.
 d. It was said that John had been rich.

(26 a)から(26 d)の非定形節の埋め込み文を持った文は、それぞれ順に(27 a)から(27 d)の定形節の埋め込み文を持った文に対応する。この(26)(27)の例文の対比から、英語の非定形節は独立した時制を持たず、埋め込み節が補部となる場合は、非定形節の時間軸上の位置づけは、主節の動詞の時制によって決定されることがわかる。そして、主節の時制と従属節の時制とが異なる場合は、非定形節に完了相の形式を用いることによって示すことができる。

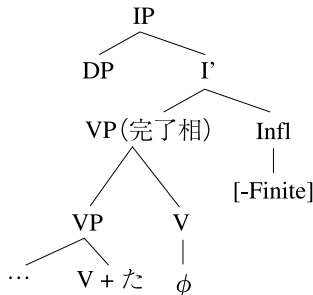
日本語の場合は、埋め込み節の動詞が原形である場合に、英語の(26 a)(26 c)のような単純形の不定詞が用いられている場合と振る舞いが同じである。そして、埋め込み節の動詞が一見したところ過去形に見えるときに、英語の(26 b)(26 d)と同様に、埋め込み節の動詞の指し示す時制は主節の動詞よりも一つ古い時制と解釈されることになる。

非定形節のVPの構造を2節で考察した動詞句の構造で表すと、次のようになる。

(28) 英語



(29) 日本語



日本語の埋め込み節の場合、英語の非定形節と同様に独立した時制を持つことがなく、埋め込み節の場合は主節の動詞によってその時制が決定される。ただし、英語との違いは、非定形節という独自の形式を持っていないことである。ここで、形式を持っていないと見られることは、2節で考察したのと同様に、該当する主要部が空の主要部であるからだ、と考えることが可能である。英語の場合も原形不定詞が非定形節に現れることもあり、必ずしも IP 主要部 Infl に to が生成されるとは限らず、IP 主要部 Infl が空となることがある。また、不定詞以外の非定形節となる分詞・動名詞はいずれも主要部 Infl が空の状態である。日本語の IP 主要部が空になっていると考えることは特別なその場しのぎの方策ではない。

このように、一見したところ、日本語の埋め込み節は定形節のように思われるが、実際は非定形節である、と考えると英語の非定形節の振る舞いと平行して意味解釈が可能となる。そのため、時制の一致が現れないことも明確に理解できる。

4. 結 語

英語には完了相・進行相を表す独自の独立した形式が存在するが、日本語にはそれに該当する語彙形式はあっても、それは他の意味にも用いられ、相表現のためだけの語彙形式ではない。本論文では、日本語に相を表す何らかの投射が存在しないということを指すのか、ということ考察した。

2節では、日本語には相表現独特の形式はなく、相表現に該当する語彙表現はそれ以外の意味をも持ちうるということを見た。一方で、英語の相表現は、独自の形式でありながら、一つの形式で複数の意味を表すが、相表現に該当する日本語の語彙は、完了相の「完了」「結果」「経験」「継続」に対して、それぞれ別々の語彙形式で対応していることも示された。従って、時制の意味解釈が収束するに当たって、英語も日本語も完了相という形式を用いることでそれを関数とし

て意味解釈の合成体を形成していく。その際に、英語は完了相に該当する VP 投射の主要部に *be* や *have* という固有の要素が顕在化することを要求するが、日本語は語彙の中の意味として *Ving* や *V-en* と同じ形式を持っているが、主要部は空であるという媒介変数の違いに還元できる。このように、英語も日本語も同様の動詞句投射を持っていると考えることが可能である。

この2節の考察を元に、3節では日本語と英語の埋め込み節の振る舞いの違いに目を向けてみた。日本語の埋め込み節には時制の一致が見られないということは、英語の非定型節と似ていることに関係がある。英語の補部となる非定形節の時制の解釈は、主節依存であり、主節との時制のずれを表すためには、完了不定詞が用いられる。日本語の埋め込み節の動詞に具現される一見したところの過去形は、この英語の完了不定詞の振る舞いと平行している。ここでは、日本語の補部となる埋め込み節は、定形節ではなく非定形節であると考え、時制の違いを表すために用いられる完了の *have* の存在から、2節での相の構造と平行的なとらえ方をし、日本語の非定形節の構造としての一案を提示した。

このように、英語と日本語の時制表現に関して、特に相という形式に注目し、一見したところ形式が存在しないように思われた日本語の相に関する表現と時制の一致が存在しない埋め込み節の構造について、日本語が全く異なる方策を用いているのではなく、同様に保有する構造を用いて、それぞれの言語が適用する媒介変数の違いによるものである、という説明を与えることが可能であることを示した。

〈注〉

1. 「何らかの影響」というのは、発話の場面によって様々な含意をすることを指す。例えば(3b)の例文で言えば、この発話がドアを開けてほしい時になされれば、「(無くしたから) 今鍵を持っていないので開けられない」というように解釈され、例えば、靴を修理する店の前で「あれ、どうしたの?」という問かけをされた場面で発話されれば、「(無くしたから) 合い鍵を(再度)作ってもらっている(からここにいるんだ)」というような解釈を受ける、というような様々な可能性を持っており、何か一つの意味に限られるものではない。
2. 日本語に英語とは違って形式的な完了相を表す独立した形式がない、もしくは具現されないのは、明示される英語の形式よりも曖昧性を持つことになる。そのような形式を用いるほうがより明確になるのに、それを持たないのは、i) 英語には確かに独自の形式はあるが、多様な意味解釈が可能のためそれほど「明確化」する役割を果たしておらず、その代わりに意味毎に語彙を使い分けるほうが好ましい／より効果的である、からなのか、ii) 日本語が中国語の時制解釈同様な場面依存の方策を用いているのか、など様々考えられる。また、媒介変数が言語間でどのようなものであるのかということも調査の必要があるが、この研究は別の機会に行うこととし、本論ではこれ以上踏み込んでいかないこととする。
3. *event* 項についての考え方としては、異なる考え方もある。例えば Higginbotham (1985) では、*event* 項の位置づけは次のようになっている。
 see +V, =N, <1, 2, E> Higginbotham (1985: 555)
 Higginbotham (1985) の項構造においては、1 は動詞 *see* の外項、2 は内項の位置で、E は *event* 項の表れる隠された項位置であるとされている。Higginbotham (1985) ではあらゆる動詞が項構造の中に *event* 項を持っている、としている。
 また、Stowell (1993) の枠組みでは、T がその補部 ZP に *Event Time* という主題役割を付与し、TP の指定辞位置に現れる ZP には *Reference Time* という主題役割を付与することになる。ここでは、Diesing (1992)、Kratzer (1995) に従っていく。
4. これらの相や受動を表す VP 投射は、必要がなければ投射されない。また、この図を含め、本論文中の樹形図では簡略化のため議論の対象とならない中間投射等を省略してある部分がある。
5. 中国語には時制は具現されないが、日本語と異なり完了相は存在する。

- i) a. 我 学 了 丙 年 俄語。
私 勉強する (了 le) 2 年 ロシア語
私はロシア語を 2 年間勉強した。
- b. 我 学 了 丙 年 俄語 了。
私 勉強する (了 le) 2 年 ロシア語 (了 la)
私はロシア語を 2 年間勉強している。
- c. 到 明年 夏天, 我 学 了 丙 年 俄語 了。
まで 来年 夏, 私 勉強する (了 le) 2 年 ロシア語 (了 la)
来年の夏までには、私はロシア語を 2 年間勉強している。

(于, 張 他 2000: 8-9)

- i) a から c に表れる了が完了相を表す。従って、英語のように相も時制もともに独自の形式として具現する言語、中国語や日本語のようにどちらか一方は独自の形式を具現する言語、というような媒介変数となるのかもしれないが、この点については、さらなる研究課題とする。
6. 同様の屈折が影響を与える位置とは、時制解釈合成の上で古い概念で言えば時制に「統率」される位置が想定される。従って、例えば主語を修飾する付加詞句の形容詞節などは影響を与える位置ではない。
7. このような時制の一致の例外が可能な場合というのには様々な制約があるが、命題の内容が一時的でなく継続的であることが要求されることもその一つである。これは、2 節で言及した述部の種類によるところが大きい。詳しくは、Niwa (2003) (2007) を参照されたい。

〈参考文献〉

- Akmajian, Adrian, Susan M. Steele, and Thomas Wasow (1979) "The Category AUX in Universal Grammar," *Linguistic Inquiry* 10, 1-64
- 張 秀, 馬 慶株 他 2000 于 康, 張 勤 編『中国語言語学情報 2 テンスとアスペクト I』好文出版
- Higginbotham, James (1985) "On semantics," *Linguistic Inquiry* 16, 547-593
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, Cambridge, Mass.: MIT Press
- Kratzer, Angelica (1995) "Stage-level and Individual-level Predicates," *The generic book*, ed. by Greg Carlson and Pelletier Francis Jeffery, Chicago: Chicago Press 125-175
- Niwa, Satomi (2003) "On Temporal Identification through Binding," *IVY* 36, 83-106
- Niwa, Satomi (2007) "On Temporal Denotation of Present Participle Relatives," *Exploring the Universe of Language: A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the Occasion of His Seventieth Birthday*, 269-283
- Ouhalla, Jamal (1990) "Sentential negation, Relativized Minimality, and the aspectual status of auxiliaries," *The Linguistic Review* 7, 183-231.
- Stowell, Tim (1993) "The Syntax of Tense," Ms., UCLA

